
4th people Alice

紅城 斜都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

4th people Alice

【Nコード】

N2908R

【作者名】

紅城 斜都

【あらすじ】

紅城と斜都による連載リレー小説。ある国のアリスに選ばれた4人は、ジョーカーのもくろみによって、国を賭けて戦うことになる。

はじめに

はじめに

『すべてを受け止めなくてもいいよ。

こらえることだけが勇気じゃない。』

b y A q u a t i m

e z

これまで生きてきたたった少しの人生の中で一番好きな歌詞。
そしてその内容は友人同士にも言えること。

さらに友人はいつまでたっても友人だから

出会えた奇跡の証として

それまでの軌跡として

この物語を残します

b y 紅城

自分に何が出来るのか、きっとそれは誰も知らない
自分で見つけるのもむずかしい、ましてや他人に決められるワケが
ない

ゼロはいくつ集まってもゼロかもしれない、

たとえ一方が100でも、他方がゼロなら同じこと

でもそれを恐れていては、何もはじまらない。

自分はすごいと思いつがるでも、やる前からあきらめるも

失敗の道にしか進んでいかない

ただ出来ることを出来る限りすればいい

物語の始まりはいつもそこ

でしょう？

大切な友人、バカ姉、ダメ弟、アドバイザー兼従兄、幸子
におくる

b y 斜 都

はじめに(後書き)

第1話につづく

NO・1 紅城

ヒュオオオオ・・・冷たい風が吹く。

こんな時は決まって良くないことがおこる。

「おい、トリム。ジョーカー様がお呼びだぞ。」

風を読んでいた俺が振り返ると、そこには火の国のアリスのブラストが

ニヤニヤしながら立っていた。

一瞬にして俺の心はくもった。

なぜなら、風の国と火の国は敵対しているからである。

「てめえ！なんでここにいるんだよ！？この場所は風の国の領域だろうが！」

「まあ、そう怒るなよ。風の国のアリスともあるうお方がそんなにカツカするのはよくないぜ？」

「だッ！黙れ！俺はスピード（剣使い）だから大丈夫なんだ！」

「何がだよ・・・ほら、早く行かないと、ジョーカー様、怒るよ？」

「・・・許可は取ったのか？」

「は？」

「ここへ来ることを、門番の誰かに許可もらったのかって聞いてんだ！」

「ああ・・・取ったよ。」

ブラストは、ポケットからクシャクシャになっている紙を取り出し、俺の前でヒラヒラさせた。

「それ、通過証じゃねえか」

俺は入国許可証のことを言っているのに。

「そつだよ。ってか行かねーのか？中央機関、Queenの1302号室に。」

「あっそっただっけか！早く言えよ！」

「言ってるのに……って聞いてんのかよ」

「テイク!!!」

俺はブラストをシカトして、『テイク』という大型ペット（動物・主に移動する時に用いられる）に乗り、Queenへと向かった。

NO・i 紅城（後書き）

ありがとうございました。

NO1 斜都に続く

「あいかかわらず、広いんだよ、ここ・・・」

つぶやいたからといって、部屋が見つかる訳ではなく、俺は同じ廊下を行ったり来たりしていた。

『1302』というのだから、ここ、中央機関の13階を目指せばいい。

だが、それ以前に、上へあがるための『モノ』が見つからないのだ。元々俺は、場所を探すのはそこまで得意ではない。むしろ、苦手な方だ。

敵対しているとはいえ、ブラストはこういう細かな所はぬけていないし、太陽の国のアリス、ネイだって異常なまでの

勘の持ち主。立場上は、その太陽の国につかえている月の国のアリス、希都にいたっては、

彼女が持つ、強力な魔法で一発だろう。

こんな俺が、何故アリスなのかという疑問は、時々俺自身も感じている。

国の代表（とまではいえないか）とは思えない言動も多々あることは自覚しているし、性格もガサツ。

そんな俺がアリスになることができたのはどうしてか。

今の俺は、答えを持たない。

「　　つと、それより、早く行かねえと・・・」

こんなことなら、外で待たせてるテイクを無理やりにも引っ張ってくればよかった。

後悔しても、もう遅い。第一、Queenはペットの持込みを禁止してたっけ。仕方あるまい。

どうして、ペット連れ込み禁止か？だって、そりゃ・・・

「あ、あつた！」

俺はやつとの思いで上がるための『モノ』が集まる場所・・・一階の、エントランスホールを見つけた。

箱状の『モノ』が、浮き沈みを繰り返している。

これにのると、エレベーターと同じように、上下どこでも行くことができるのだ。

ただし、電気で動く『エレベーター』とは違い、動力源は不明だがそれに乗り込んだ俺は、たくさんあるボタンの中から『13』を押した。

外から見れば、そこまで階があるように見えないのに・・・。

それなのに、風の国からでも、その『威圧感』たつぷりな姿を見ることが出来る。つくづく不思議な建物だ。

13回で止まり、俺は箱から降りる。と、急いで1302号室を探し、トビラを開けた。

NO・i 斜都（後書き）

ありがとうございました。

NO・2 紅城に続く

NO.2 紅城

予想どおり、他の3人のアリスはもうすでに集まっていた。しかし、予想に反し、ジョーカー様の隣には、何かが座っていた。・・・うさぎだった。

俺は、過去にも一度、同じうさぎを見たことがあった。

「トリム。そんな所に突っ立ってないで、中に入りたまえ。」
・・・後ろに目でもついているのだろうか。

毎回毎回こちらを見向きをせずに、ジョーカーは言う。
俺は部屋の中に入り、トビラを閉めた。

「ここに呼び出したのは、何の理由があるからですか？」
ネイが言った。

ジョーカーは口を開いた。

「君達をアリスに選んだのは、このうさぎだということ覚えてるな？」

「・・・。」

黙っている俺ら4人を無視して、ジョーカーはさらに続けた。

「諸君。ついてきたまえ。」

ジョーカーは音もなく立ち上がると、1302号室の奥にある、カーテンで仕切られている部屋の前に行き、立ち止まった。

ジョーカーはニヤリと笑い、言った。

「驚け」

ジョーカーはそう言った瞬間、カーテンを引いた。

「な・・・。こ・・・これは・・・!!」

少なくとも、俺は驚いた。

そこにあつた装置が、何なのか分かったからだ。

「今から君たちに、あるゲームをしてもらう。」

ジョーカーは話しだしたのだった。

NO・2 紅城（後書き）

ありがとうございました。

NO・2 斜都 につづく

NO.2 斜都

「ゲームは簡単、『宝探し』だ。」
そう言つて、ジョーカーはチェスの板を四枚、まるで紙を持ち上げるかのように軽々と、ひらひらとふつてみせた。

装置に驚いている俺達（だと思う）は、誰も口を開かない。

「このチェス板に合うチェスのこまを、ある世界に飛ばした。黒のみを全てだ。」

君たちにはこれから自分を含めた4人のナイトで各国の代表として、チェスのこまを探してもらおう。」

「それで、この装置が……」

さすがのブラストも驚いたように目を見開いて、つぶやいていた。

「でも、これは、つくつてはならないとさだめられていて……」
ネイが、まゆをよせて言葉を発するも、ジョーカーににらまれ、黙り込む。

希都は変わらず無表情だが、目が困惑したように泳いでいた。

「チェスのこまを全て見つければ、ここに帰ってこられる。」

白のこまは全てQueenにおいてあるので、黒だけを探すのだ。

期間は、そうだな……7週間にしよう。」

一体、何のために……？渦巻いたのは。ほかでもない疑念だった。俺は、ジョーカーの、中央機関Queenの真意をはかりかね、口を真一文字に結ぶ。

「見つけ……出せなければ……？」

「滅ぶのみ。全てがな。」

にやりと笑つて、ブラストの言葉に答えたジョーカーは、隣にいるうさぎを示してみせた。

「ナイトは、このうさぎが決めてくれる。」

ネイの、焼けた肌に、大きな汗の雫がうかんでいるのが見える。アリスである俺達にも、発言権はジョーカーの前だと消えてしまう。そんな中で、拒否権などが、あるはずもなかった。

当然のように、ことは進んでいく。

「ああ、一つ、言い忘れていた」

ジョーカーが思い出したように言った。

「チェスのこまは1セットしかない」

それは、死刑宣告のようにも聞こえた。

自分が生きる残るためには、他をギセイにしなければならぬ。

つまり、共倒れもありうる、ということなのだ。

背筋がゾクリとして、俺の顔がみるみる青ざめるのが分かる。

「人質は、自分の国だと思ってくれ。」

ジョーカーは再びにやりと笑った。俺達小国民は、Queenに絶対服従、逆らうことは許されない。

それでも、今日ばかりは、ジョーカーが悪魔にしか見えなかった。

口に出してはならない思いをぐつと胸にとどめて、俺は唇をかみしめる。

「さあ、ゲームの始まりだ」

NO・2 斜都(後書き)

ありがとうございました。

NO・3 紅城 につづく

NO.3 紅城

「まずはじめに、4人のナイトを決めなければな。」

啞然として立ちつくしている(はずの)俺ら4人をよそにして、ジョーカーは楽しそうにいった。

すると、ジョーカーの隣に座っていたうさぎが立ち上がって言った。

「今から月の国、太陽の国、風の国、火の国のナイトを決めます。」
そう言っと、首からさげていた金の鎖がついている時計を持ち、開けた。

「はじめに、月の国です。希都様はハートつまり回復、その他魔法です。ので他の3人を決めます。」

まず、ダイヤの弓使いからです。」

うさぎは、時計のボタンを押した。

・・・いよいよゲームの始まりだ。

うさぎの持っている時計には数字が書いてあった。

その数字はおそらく国の中の番地。

ルーレット方式で細かい番地にしほりこみ、その番地の中に同じ職業の人がいなくなった時、その人になる。

・・・そういうことだろう。

「決まりました。174番地の弓使いの方を月の国のダイヤのナイトとします。」

同じようにしてスペードの剣使いやクローバーの銃使いも決められた。

合計16名のアリスを含むナイトが決まったあと、うさぎが言った。

「ナイト様に、本日決まったことを報告する場合、この紙を見せる
といいでしょう。」

うさぎは4つの紙の束を取り出した。

「一つは文章で概要がつつつである紙、もう一つはこの4国を示す地図。」

そして残りの1枚については自分達で考え、有効に利用してください。」

うさぎはその言葉を言い終えると同時に消えた。

ジョーカーは言った。

「失敗すれば、先ほど述べたように、この機械でそれぞれの国を滅ぼす。」

「でも……」

ネイが何か言いかけたが、ジョーカーが言った。

「用事は済んだ。帰りたまえ。」

こうなるともう何を言っても無駄なのは俺達アリスが一番知っていた。

俺達は、自分の国のナイトを呼ぶため、1302号室をあとにした。

NO.3 紅城(後書き)

ありがとうございました

NO.3 斜都 につづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2908r/>

4th people Alice

2011年10月8日20時08分発行